The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	仏涅槃図の研究 ： 図像とテキストの関係をめぐって
Author(s)	古谷, 優子
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33857
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕仏涅槃図の研究―図像とテキストの関係をめぐって―

学位申請者　富岡　優子

本稿は、三篇の論文および序文と結語からなり、いずれも仏涅槃図とその所依たるテキストの関係に着目し、その関係性を明らかにしようとしたものである。そして根本たるテキストを粗略に扱ってきた従来の涅槃図研究に一石を投じ、一から見直すことの重要性を提起するものである。

第１篇では、石山寺蔵に所蔵される仏涅槃図（以下石山寺本）を扱った。

石山寺本は、他の涅槃図と異なる特徴を持つと先学により指摘されてきた。例えば、釈迦は目を開き、眼前の会衆を見つめるように横たわる。会衆は悲しみの表情を浮かべる者もあるが全体的には穏やかな様相を呈す。また牀台前には供物台、その手前には立姿の菩薩と跪く俗形が描かれるなどである。関口正之氏が『大般涅槃経』などの序品に見られる釈迦入涅槃前の姿を描いたものであるとの注目すべき見解を提起されたが図様の全てが解釈なされたわけではなかった。

この特徴ある図像を解明するため、申請者は涅槃に関する根本的なテキストを通覧するという作業を行った。この作業を踏まえた上で、石山寺本に釈迦の眼前に描かれる供物台前の人物について、（１）立姿の菩薩と華籠を捧持人物（２）冠に「王」と付された人物（３）若い僧侶と俗形の老人、と分けて考察し、（１）文殊菩薩と純陀（２）阿闍世王（３）阿難と須跋陀羅、と比定できること明示した。これらの人物はいわゆる「大乗涅槃経」の主要な説話場面あらわれる人物であり、さらには石山寺本の図様の特徴が大乗涅槃経で解釈できることから、石山寺本が大乗涅槃経を体現したものであると結論付けた。

第２篇では京都・万寿寺に所蔵される涅槃の場面を中心に涅槃の前後の事件を配した涅槃変相図（以下万寿寺本）についての考察を行った。

万寿寺本は涅槃、純陀供養、虚空上昇、聖棺不動、聖棺飛旋、金棺出現、迦葉接足、分舎利の計八場面から成る。本図のような涅槃変相図については、先学により明恵（1173～1232）撰述の『涅槃講式』との関係性が述べられてきた。確かにこの講式と合致する箇所もあるが、講式に記述のない純陀供養、金棺出現の二場面をいかに解釈するかなど、未解明の問題が残されていた。

申請者はまず、叡福寺所蔵の涅槃変相図との比較を通して本図が南宋の図様の影響を受けていることを確認した。次に画面構成に着目し、本図の上部六場面については明恵の『涅槃講式』の順序通り、虚空上昇の場面を起点に円環構図をなすこと明らかにした。また、残った純陀供養と金棺出現については、平安中期の天台僧源信（942～1017）撰述の『涅槃講式』に、純陀の供養に倣い福徳を得ることが涅槃会の趣旨とあることに加え、金棺出現に関する記述が見出せること、また、京都国立博物館所蔵の『釈迦金棺出現図』に、金棺出現に加え、純陀供養の場面が描きこまれている点から明恵以前の古い涅槃会の伝統が息づいている可能性を述べた。

さらに、万寿寺本は東福寺の塔頭寺院であった三聖寺の所蔵品であったこと、同寺では東福寺開山円爾の影響を受けて南宋の文化の流入があったとみられること、一寺院内で複数の教学を学ぶ諸宗兼学の寺院として様々な出自の人々が集う寺院であったことを述べ、このようなバックグラウンドから様々な要素を包含する万寿寺本のような図像が生まれたと指摘した。

第３篇では京都国立博物館所蔵「釈迦金棺出現図」（以下金棺出現図）を取り上げた。

金棺出現図には、金棺出現の場面とは無関係な、純陀が描かれていることが先学により明らかにされてきたが、これらを結びつける理由については明らかではなかった。そこで、本稿では純陀の供養についての記載がある大乗涅槃経を改めて見直し、金棺出現図で釈迦の正面に描かれた唯一立姿の人物について、純陀の供養の際に登場する文殊菩薩であることを明らかにし、文殊とその背後に描かれた阿難で文殊の阿難救済、阿難とそれに連なる須跋陀羅で須跋

陀羅の帰依、と大乗涅槃経に表される場面を暗示していることを指摘した。

さらに金棺出現、純陀の供養の場面では金棺から起き上がる瞬間、供養をする瞬間、それぞれに釈迦の毛孔より化仏が放たれる点に共通性が見出せ、本図に描かれる化仏放出の様子は金棺のみでなく純陀の供養にもかかっていること。さらに大乗涅槃経と金棺出現を結ぶテキストとして仏母経の一種である『大般涅槃摩耶夫人品経』には金棺出現の場面の前に大乗涅槃経にある文殊の阿難救済が記され、元時代に編集された『勅修百丈清規』には純陀の供養、文殊の阿難救済、須跋陀羅の帰依、そして釈迦の涅槃をはさんで金棺出現と本図に描かれている場面が連続的にあらわされていることから、本図の制作当時にもこのようなテキストの存在が考えられることなどを述べた。

最後に、本図のような作品の制作背景として、十世紀の半ばに若くして亡くなった朱雀院の追善供養にあたり、朱雀院の実母、当時国母でもあった藤原穏子が作らせた願文に、穏子を仏母である摩耶夫人、朱雀院を釈迦に見立てる表現がなされることから、本図のような図像が高貴な人物の追善供養の本尊、もしくは荘厳の一つとして作られていたという新知見を述べた。

以上、三篇の論考を通して、涅槃図研究で等閑視されていた、または都合よく扱われてきたテキストの見直しを行い、涅槃図の図像形成には根本となる涅槃経に加え、儀式や法要のために制作された涅槃経から派生したテキストが影響を与えていることを具体的に指摘した。テキストやこれにともなう歴史的背景の考察により涅槃図研究の新たな可能性が見えてきたと考える。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　古谷　優子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	藤岡　穣
	副 査	大阪大学　教授	奥平　俊六
	副 査	大阪大学　教授	橋爪　節也

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　仏涅槃図の研究―図像とテキストの関係をめぐって－

学位申請者　古谷　優子

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　藤岡　穣

副査　大阪大学教授　奥平　俊六

副査　大阪大学教授　橋爪　節也

【論文内容の要旨】

本論文は、滋賀・石山寺に伝来した鎌倉時代前期の涅槃図（以下、石山寺本）、京都・万寿寺に伝来した鎌倉後期の涅槃変相図（以下、万寿寺本）および現在京都国立博物館が所蔵する平安時代の釈迦金棺出現図（以下、金棺出現図）の 3 点の仏涅槃を主題とする絵画作品をとりあげ、各々について図様とその所依経典等を検討し、新たな解釈の可能性を示したものである。

第 1 部では石山寺本を主題とし、従来から指摘されてきた特異な図様に改めて着目し、それらが大乗涅槃経に基づくこと、そして同図が大乗涅槃経の教理を体現するものであることを明らかにした。すなわち、牀台に横臥する釈迦の前に置かれた供物台前に描かれた人物たちが、純陀の供養、須跋陀羅の帰依、阿闍世王の帰伏という大乗涅槃経に描かれる説話的事象を網羅的に表していることを読み解くとともに、それがそのまま「如来常住」「一闡提成仏」といった大乗涅槃経の教理を象徴することを指摘した。横臥する釈迦が目を開き、右手を差し出して説法し、それを讃歎するかのように上空に楽器や宝花が舞う点、大きな蜂の存在なども含め統一的な図像解釈を提示した。

第 2 部では万寿寺本を主題とし、同図の上部は明恵（1173～1232）撰述の『涅槃講式』を典拠とし、そこに記された涅槃前後の場面（虚空上昇→涅槃→聖棺不動→聖棺飛旋→迦葉接足→分舎利）を時系列に従って円環構図で描いたものであること、一方、下部に描かれた純陀供養、金棺出現の 2 場面については、源信（942～1017）撰述の『涅槃講式』に純陀の供養に倣い福徳を得ることが涅槃会の趣旨とされ、同講式には金棺出現に関する記述もあることから、平安時代以来の涅槃図の伝統を継承することを明らかにした。加えて、同図に南宋時代の涅槃図の影響がみられること、同図が東福寺の塔頭であった三聖寺に伝来した可能性が高いことを指摘し、諸宗兼学であり、開山円爾以来、南宋文化の受容に積極的であった東福寺の周辺において本図が受容されたことの意義を論じた。

第 3 部では金棺出現図を取り上げ、同図が釈迦が摩耶夫人と対面する金棺出現を表すことに加え、棺の前に純陀の供養、文殊の阿難救済、須跋陀羅の帰依の場面が連続的に描かれていることに着目し、これらに共通のテキストとして『勅修百丈清規』や仏母経の一種である『大般涅槃摩耶夫人品経』などが想定されることを指摘する。さらに、十世紀半ばに若年で亡くなった朱雀院追善供養のための実母藤原穏子の願文に、穏子を仏母摩耶夫人、

朱雀院を釈迦に見立てる表現が見出されることから、同図が涅槃会ではなく国母による国王追善の場において懸用されたものではないかとの新たな解釈の可能性を提示した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、石山寺本、万寿寺本、金棺出現図という 3 点の涅槃図に関するモノグラフを 3 部構成としたもので、本文は 400 字詰原稿用紙に換算して約 200 枚、これに表と図版からなる資料編を付している。各モノグラフは、先行研究を丹念かつ批判的に読み込んだうえで、作品の図様を直裁に読み取り、それを涅槃関係のテキストに照らして解釈し、さらに思想的背景や制作目的や機能について考察を加えるという共通の手法によっている。きわめてオーソドックスな研究手法ながら、それを徹底することによって従来の研究を凌駕し、とりわけ図様とテキストの関係を総合的に解釈することにより斬新かつ蓋然性の高い結論を得ている点が高く評価される。

具体的に言えば、石山寺本を主題とした第 1 部では、これまでテキストとしてはほとんど等閑視されてきた大乗涅槃経に典拠があることを示し、源信の涅槃講式にも述べられる通り、純陀の供養を中心の画題とすることによって涅槃会を催すことで福徳が願われていたことを指摘した。大乗涅槃経を所依経典とみることにより登場人物をはじめ画中のモチーフを悉く解釈していく論法は鮮やかであり、平安時代における涅槃会の意義の理解にも裨益する結論を導き出している。万寿寺本の涅槃変相図をとりあげた第 2 部では、構図の有り様から中央の涅槃を除く 7 場面が上部の 5 場面と下部の 2 場面に分かれることを指摘し、それぞれが明恵と源信の涅槃講式に基づくことを読み解いた。涅槃図と涅槃講式の関係についてはこれまでにも指摘があったが、それを初めて具体的に論じ得たことは画期的な成果と言える。また、第三部では金棺出現図について、これが涅槃後の金棺出現のみならず涅槃直前の純陀供養を主題としていることを踏まえ、その典拠となるテキストを博捜した結果、中国において 8 世紀後半～10 世紀頃（唐～五代）に成立したとみられる涅槃経典や元代成立の『勅修百丈清規』にその一連の出来事が記されていることを見出した。加えて、これが涅槃会の本尊としてではなく貴顕の追善供養の儀礼の本尊として制作されたのではないかとの指摘には大きな可能性を感じる。

以上のように本論文には多くの斬新な着想や提言が認められるが、ことに第 2 部、第 3 部の論述内容には未整理な点があり、なお可能性の指摘にとどまっていると言わざるを得ない。また、鎌倉時代以降の涅槃図の多様な展開については未着手のままである。しかしながら本論文は、図像解釈が断片的であったがゆえに構図を中心に一面的にしか論じて来られなかった涅槃図の展開について、典拠となるテキストや教理を踏まえて論じる必要性と可能性とを示し、涅槃図研究の新たな地平を開いたことは間違いない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。